

# 『リュトブフの貧困』の一解釈

滝 口 秀 人

はじめに

『リュトブフの貧困』 *Povretei Rutebeuf* については、すでに多くのことが語られている。その多くは、この作品に、一個人による「貧困」の表明という要素を認め、近代的叙情詩の萌芽と、この作品を紹介する。

この傾向は、1938年にハリー・ルカス Harry LUCAS が、この作品を一連の詩群、いわゆる「身辺詩」 *Poésies personnelles* と共にまとめて校訂・出版した後の事と思われる。ルカスが規定した枠を受け入れ、「貧困である」という「私」をリュトブフその人と同定して考えるならば、『リュトブフの貧困』は、中世抒情詩における「私」の表出問題に接続される。だが、この詩は、それ程までに理解し易い詩なのだろうか。

1992年に、中原暁彦氏がリュトブフの貧困に関する近年の論文をまとめられた。以下に引用する。

「リュトブフの貧困が現実根ざしたものなのかそれとも単なる虚構かという問題に対しては、大学論争に深入りし、宗教界・俗界の権力機関との関係が悪化し、注文が途絶えたために貧窮に陥り、そこから一連の貧困の唄が誕生したのだと了解してよいだろう。…（中略）… Regalado 女史が述べていたように、リュトブフは伝統が提供する *topoi* を使ったという点は疑いえないにせよ、この理論はなぜ詩人が、ある特定の *topoi* を撰んだのかという問題には答えてくれなかった。一方、Dragonetti 氏や Dufournet 氏は *poésies personnelles* を告白に名を借りた詩学の展開として理解しているのだが、Dufeil 氏の仮説の示唆するところに従えば、これらの作品には大学論争の経験が潜んでいる可能性があるのであって、こうした問題の解明が *poésie personnelles* に取り組むに当たっての今後の課題となろう。」<sup>2)</sup>

各研究者の意見を紹介すると同時に、中原氏個人としては、「リュトブフの貧困が現実に根ざしたものなのかそれとも単なる虚構か」という問題に対しては、大学論争に深入りし、宗教界・俗界の権力機関との関係が悪化し、注文が途絶えたために貧窮に陥り、そこから一連の貧困の唄が誕生したのだと了解してよいだろう」と、リュトブフ＝貧困説による結論を提示されている。

一個人の『貧困』を表明するという、現代から見れば極めて「個人」的な命題を扱っている点ばかりが目されるこの詩だが、リュトブフの他の作品との関連を考えると、問題を「私」の表出問題だけに限定することは出来ない。そもそも、「私」であるリュトブフは本当に貧困でありうるのか。また、リュトブフが貧困であったとしてもなかったとしても、「貧困」のテーマを使用した理由は何なのか。本稿では、『リュトブフの貧困』の意図を、細かな箇所解釈を確定すると共に、探してみたい。

## I. テクスト

以下に、ザンク Michel ZINK による 1990 年の校訂版<sup>3)</sup>を、転載し、訳を付す。

### C'EST DE LA POVRETEI RUTEBUEF

#### I

	Je ne sai par ou je coumance,	<i>f.45 r<sup>o</sup>1</i>
	Tant ai de matyere abundance	
	Por parleir de ma povretei.	
4	Por Dieu vos pri, frans rois de France,	
	Que me doneiz queilque chevance,	
	Si fereiz trop grant charitei.	
	J'ai vescu de l'autrui chatei	
8	Que hon m'a creü et prestei :	
	Or me faut chacuns de creance,	
	C'om me seit povre et endetei.	
	Vos raveiz hors dou reigne estei,	
12	Ou toute avoie m'atendance.	

II

Entre chier tens et ma mainie,  
Qui n'est malade ne fainie,  
Ne m'ont laissé deniers ne gages.  
16 Gent truis d'escondire arainie  
Et de doneir mal enseignie :  
Dou sien gardeir est chacuns sages.  
Mors me ra fait de granz damages ;  
20 Et vos, boens rois, en deus voiaiges  
M'avez bone gent esloignie,  
Et li lontaniz pelerinages  
De Tunes, qui est leuz sauvages,  
24 Et la male gent renoie.

III

Granz rois, c'il avient qu'a vos faille,  
A touz ai ge failli sanz faille.  
Vivres me faut et est failliz ;  
28 Nuns ne me tent, nuns ne me baille.  
Je tous de froit, de fain baaille,  
Dont je suis mors et maubailliz.  
Je suis sanz coutes et sanz liz,  
32 N'a si povre jusqu'a Sanliz.  
Sire, si ne sai quel part aille.  
Mes costreiz connoit le pailliz,  
Et liz de paille n'est pas liz,  
36 Et en mon lit n'a fors la paille.

*f.45 r<sup>o</sup>2*

IV

Sire, je vos fais a savoir,

Je n'ai de quoi de pain avoir.  
A Paris sui entre touz biens,  
40 Et si n'i a nul qui soit miens.  
Pou i voi et si i preig pou ;  
Il m'i souvient plus de saint Pou  
Qu'il ne fait de nul autre apotre.  
44 Bien sai *Pater*, ne sai qu'est *notre*,  
Que li chiers tenz m'a tot ostei,  
Qu'il m'a si vuidié mon hostei  
Que li *credo* m'est deveciez,  
48 Et je n'ai plus que vos veeiz.

Explicit

## リュトプフの貧困

### I

どこから始めようか、分からない程、  
私はたくさん材料を持っているのです、  
私の貧困を語るための材料を。  
4 神かけて、お頼み申し上げます、フランス国王様  
私に、いくばくかの援助金を、くださいませ。  
そうすれば、王様はとても偉大な慈悲をなしたことになりましょう。  
私は他人の財産で暮らしております、  
8 それは、他人が私を信用し、貸してくれたものです。  
だがいまや、私に対する信用は、なくなってしまいました、  
というのも、私が貧乏で、借金していると、知られたからです。  
なのにあなた様は、王国の外に、いらっしゃいました、  
12 あなた様に、私の希望を、すべて、かけていたのです。

### II

高くつく時代が、又、わが家族が、

- 家族は病気なわけでもなく、頭がおかしいわけでもありませんが、私にお金も資産も残してくれませんでした。
- 16 私は、断るのが上手な人々に会いました、  
わけ与える、ということを、しっかりと教えられていない人々に会ったのです。  
各々が、自らの財産を守ることに、長けているのです。  
「死」は私に対して、大きな損害を、まさに、なしたのです。
- 20 そしてあなた様、よき王様、二度の御旅行によって  
あなた様は、私から、親切な人々を遠ざけたのでした。  
未開の土地であるチュニスへの  
遠き巡礼によって、遠ざけたのでした、
- 24 そして、悪しき者どもが、その土地(に行くの)を拒んだのでした。

### III

- 偉大なる王様、もしあなた様が軽く扱うのなら、  
私は、例外なく、皆から軽く扱われたのですから、  
食べるものは足りなくなりますし、又、足りなかったのです。
- 28 誰も私に贈り物をしませんし、施してくれる人もおりません。  
寒さに咳をして、空腹にあくびをしております。  
だから私は死ぬのです、そして悪し様に扱われるのです。  
私は毛布も無いし、寝床也没有せん。
- 32 サンリスに至るまで、これほど貧乏な者はおられません。  
王様、私はどこへ行けばよいのか分かりません。  
私の両脇腹は、藁に馴染んでいます。  
藁の寝床は、寝床ではありません、
- 36 私の寝床には、藁以外何もないのです。

### IV

- 王様、あなたにお知らせします、  
私はパンを手に入れる方法も持ってないのです。  
パリでは、私はあらゆる財産の間に、居ります、
- 40 しかしながら、私の物であるような財産はまったくありません。  
私は財産を少しだけ見ます、そして、少ししか受け取れません。

- 聖パウロを、よく思い起こすのです  
他の使徒たちを思うよりも。
- 44 「父」はよく知っておりますが、「我々(の)」が何であるかは知りませぬ。  
高くつく時代が、私からすべてを奪ってしまいました、  
その時代が、私から、私の主君を、取り去ったので、  
「クレド(私は信用する)」が私に対しては、拒絶されたのです。
- 48 そして、あなたが見ている以上の物は、持っておりません。

(ここに終わる)

さて、この作品が何を語っているのかを見極めるために、細かな意味の  
確定が必要である。また、作品を取り巻く当時の状況を確認しなければなら  
ない。

## II. 写本と今までの校訂版

『リュトブフの貧困』のように、現存写本が一つしかない場合、語句の  
意味を確定する作業は、文献学的・歴史言語学的な考察により、様々な可  
能性を探ることから始まる。

『リュトブフの貧困』は、フランス国立図書館フランス語写本第 1635  
番写本(旧 7633 番写本)の第 45 葉表にのみ記されている。そこで、こ  
の写本について詳細に報告しているファラル Edmond FARAL とバスタン  
Julia BASTIN の記述を、以下に要約する<sup>4)</sup>。

この写本は(全体で)二つの部分に分かれており、最初の部分(第  
1 葉～第 84 葉まで)にリュトブフの作品群があり、第二の部分(第  
85 葉～第 181 葉)に、「アレクサンドル物語」Roman d'Alexandre が  
書かれている。よい紙が使われている。第一部分は 13 世紀の綴りで、  
とても丁寧に書かれており、しっかりと形は整えられていて、第 84  
葉の裏まで、書体は統一されている。ただ、第 1 葉の表だけは異なる  
書き方で、文字は、より丸く、より広く、より小さく、各行の最初の  
文字は、より際立たせられて、綺麗に書かれている。「聖なる教会の  
嘆き」La Complainte de Sainte Église (= La vie du Monde) が含ま  
れていることから、この写本は 1285 年よりも後に写されたと証明さ  
れる。

リュトブフの名が冠せられている 56 作品のうち、50 作品がこの写本に掲載されている。その内 15 作品はこの写本にしかない。特に十字軍関係の作品が、この写本には残されている。

二人の写字生により写本は作られている。一人目は最初のページのみ書き写している。第一部分の他の箇所をすべて書き写した二人目は、綴り字からして、フランス東部の者である。しかし、彼の仕事全般にわたって、綴り字が、統一的システムによって、書かれているわけではない。おそらく、彼は、彼自身が所属する地域とは異なる地域に由来する親写本を写したので、様々な箇所で綴り字が入り混じったのであろう。(括弧内の記述は滝口)

「リュトブフの貧困」は、過去七回校訂されている(下記のものに依拠している選集等に収められたテキストは除く)。年代順に、校訂者の名を上げると、ジュビナル Achille JUBINAL (1839)<sup>5)</sup>、クレスナー Adolf KRESSNER (1885)<sup>6)</sup>、ルカス Harry LUCAS (1938)<sup>7)</sup>、ギエット Robert GUIETTE (1950)<sup>8)</sup>、ファラル＝バスタン (1959-60)<sup>9)</sup>、デュフルネ Jean DUFOURNET (1986)<sup>10)</sup>、ザンク (1990)<sup>11)</sup> である(括弧内は出版年)。

このうち、ファラル＝バスタンの校訂版が研究する際に有効な校訂版とされている<sup>12)</sup>。その後に出版された中で最も新しい版であるザンクの校訂版は、ファラル＝バスタン版と比較して、以下の改革を行った。

#### ①底写本を変更

ファラル＝バスタン版はパリ国立図書館 837 番写本(A 写本)を底本としていたが、ザンク版はパリ国立図書館 1635 番写本(C 写本)を底本にしている。

#### ②作品全体を年代順に並べる

ファラル＝バスタン版では作品のテーマ別に並べられていた作品を、デュフェイユの研究<sup>13)</sup>より、年代順に配置した。

二点の変更点のうち注目すべきは、②作品全体を年代順に並べる、という試みである。作品を取り巻く環境が切断され、作品のみが残っている詩を鑑賞する場合に、詩の前後関係を確認することは、作品の解釈、時には細かい語句解釈にまで影響する。ザンクの校訂版は、「仮説に過ぎない」<sup>14)</sup>するデュフェイユの研究に基づくにせよ、詩の解釈に新たな光を投げかけるきっかけとなる。

さて、『リュトブフの貧困』自体の解釈の前に、細かな語句の意味を確定したい。

### III. 細かな意味の確定

第 19 行目で、詩の雰囲気は一変する。

Entre chier tens et ma mainie,  
Qui n'est malade ne fainie,  
Ne m'ont laissié deniers ne gages.  
Gent truis d'escondire arainie  
Et de doneir mal enseigne:  
Dou sien gardeir est chacuns sages.  
**Mors me ra fait de granz damages;**

高くつく生活と、わが家族、  
家族は病氣なわけでもなく、頭がおかしいわけでもありませんが、  
私にお金も資産も残してくれませんでした。  
私は、断るのが上手な人々に出会いました、  
わけ与える、ということを、しっかりと教えられていない人々に出会ったのです。  
各々が、自らの財産を守ることに、長けているのです。  
「死」は私に対して、大きな損害を、まさに、なしたのです。

「死」とは何か。

この点について、各校訂者の見解を参照してみよう。ルカスは後注に於いて「リュトブフはたくさんの友と保護者を失なった。そのうちある者は死に（中には、リュトブフが「嘆き」*Complainte* を捧げたウッド伯 *le comte d'Eudes* も恐らく含まれる）、他の者は聖ルイと共に十字軍に行った。」<sup>15)</sup>と記している。ファラル＝バスタンは、*ra* に注を付し、「*a, d'autre part*」と、*avoir* の現在形三人称単数に *r* が付いている説明をした後、*Mors* について、「疑いなく、庇護者の死を表す。」と、解釈する<sup>16)</sup>。デュフルネは、特に注記はせず、19 行目に、「一方、死は、私に損害をなすことに精を出していた。」と訳を付している<sup>17)</sup>。ザンクは、1990 年の校訂版で、「おそらく、詩人の保護者の死であろう。」と注記している<sup>18)</sup>。

日本の研究者はどのように意味を捉えているか。これまでになされてきた邦訳を参照してみよう。



『リュトプフの貧困』は過去 3 回訳されている。年代順に上げれば、岩本訳 (1980)<sup>19)</sup>、杉原訳 (1989)<sup>20)</sup>、天沢訳 (1990)<sup>21)</sup> である。

	v.19
岩本訳	死神の方ではわたくしに大損害を加えました。
杉原訳	保護者を亡くしたのもまたひどい痛手でした。
天沢訳	そして「死」が私にひどい仕打ちをしてくれました。

いずれの訳も Mors を「死」「死神」という意味で捕らえていることが分かる。岩本訳はファラル・バスタン版を、天沢訳は、アルベール・ポフィレによる流布版<sup>22)</sup>を参照しており、それぞれの校訂者の解釈を受け入れたことが分かる。

Mors が、「死」以外の意味を表す可能性は無いだろうか。

Mors の意味を確認する。

#### a) Mors = 死

Mors は本来 Morts (Mort「死」＋主格単数の s) であり、子音が重なった結果 t が落ち Mors となった、と解する。これが、今までの校訂者に受け入れられてきた解釈である。

ファラル＝バスタンは、リュトプフ作品の綴り字法を細かく分析している。それによると、語末の ts は、確かに、s のみとなる例が、sains<saints, repentans<repentents など、他の箇所にもある<sup>23)</sup>。従って、形の上では、Mors を Morts の意味で捉えることは、可能である。また、フランス語 mort はラテン語 Mors に由来しているので、その原型を留めている、と解釈することもできよう。

ただ、詩の流れからいって、突如として「死」がアレゴリックに登場するのは、奇異な感じを受ける。「生活」vie という語が、「死」の前後で (13・27 行目)、アレゴリックに使われてはいる。しかし、「生活」vie という語が、詩の内容と密接に繋がっていることに比べて、「死」は、前後の行の関係から見ても、異様である。

そこで、綴字法上問題なく、意味の繋がりがより適正な語句を探してみたい。

#### b) Mors ≠ 死

Mors は別の単語として読み取れないだろうか。

Mors をトブラー＝ロマチの辞書で検索すると、意味として現代フランス語の mœurs（ラテン語 mores に由来）が記載されている<sup>24)</sup>。つまり、歴史音声学的に、まず子音にはさまれた弱母音の e が落ち古フランス語 mors となり、その後単音節単語の母音 o が eu となり現フランス語 mœurs となったと判断している<sup>25)</sup>。このことを受け入れれば、語形の上では、この個所を mœurs という意味で読み取ることは可能である。一方で、「死」を意味する語は mort で項目が立てられている。

次いで、前後関係を確認するため、19 行目前後に於ける詩の流れを見よう。

第二連が始まると、詩人は自らにお金が無いこと、分け前に与ることがないことを語る。19 行目の後には、王が、詩人から「良き人々」を遠ざけてしまったことを嘆く。

この前後関係から考えると、「死」を突如として語るのは、不自然である。歴代校訂者は「(庇護者の) 死」と解釈しているが、ここでリュトブフがいきなり庇護者を持ち出す決定的な理由は無い。庇護者の死を語るにしても、「死」だけでは、何を意味しているのか、当時の人でも分からないのではないのか。あまりにも言葉が足りないと言わざるを得ない。

そこで、視点を広げて、作品の構成から、この箇所について考えたい。

この作品は、筆者が、貧困を王に嘆く、という形式で成り立っている。

内容を、乱暴にまとめてみよう。第一連は王に対する言葉、挨拶である。第二連は、「私と社会」の関係、社会的言説が中心となっている。第三連は「私の窮状」、個人的言説が中心となり、第四連は、再び王に対する言説である。ただ、最後の連であるゆえ、第二・三連での個人的言説、社会的言説を前提とした、内容のまとめをなしている。

問題の箇所、第二連は、社会と私の関係を語っている。とすれば、よりこの箇所に適した、社会的な要素を孕んだ意味を読み取るべきではないだろうか。

結論として、Mors は、現代フランス語での mœurs「慣習・風習・行動様式」の意味で取りたい。そうすれば、第二連前半からの意味の繋がりもよりスムーズになる。形の上でも問題が無い。訳としては、「慣習が、私に大きな損害を、まさに、なしたのです。」となる。

ではなぜ、庇護者の「死」ではなく、自らを取り巻く「慣習・風習」が彼に損害を与えるのか。彼に「貧困」を語らしめた慣習 Mors とは何であ

ろうか。この詩全体の問題を考えてみよう。

#### IV. 全体の問題

リュトブフは貧困か？

1938年にルカスが「身辺詩」*poésies personnelles* として『リュトブフの貧困』をまとめて以来、ファラル＝バスタン版(1959-60)までは、作者＝リュトブフ＝貧困と考えられていたと判断して良いだろう。1980年代に至っても、デュフルネ氏は「リュトブフは貧困にあえいでいたのであり、それが彼を詩人たらしめた。」<sup>26)</sup>と言い、リュトブフ＝貧困説の立場を明確にしている。また、1990年に中原氏も「リュトブフの貧困が現実に根ざしたものなのかそれとも単なる虚構かという問題に対しては、大学論争に深入りし、宗教界・俗界の権力機関との関係が悪化し、注文が途絶えたために貧窮に陥り、そこから一連の貧困の唄が誕生したのだと了解してよいだろう。」<sup>27)</sup>とリュトブフ＝貧困説を認めている。

ただ、1980年に岩本氏は、「しかし呉々も用心しなければならない。何しろリュトブフは『香部屋係りと騎士の妻』第760行と『聖エリザベト伝』2161の二度にわたり自ら「ウソをつく」と告白しているのだから。」<sup>28)</sup>と、作品の虚構性を認め、注意を喚起していた。

一方で、別の観点からこの「貧困」を考察する向きもある。冒頭において紹介した Regalado 女史は、修辞法の視点からリュトブフ作品を分析した。「リュトブフは語るのに適する詩的人格である、『すべてを失った貧乏な馬鹿』を採用しているだけにすぎない。…(中略)…リュトブフは、自らの不幸な詩の中で、自分に降りかかっている酷い運命をさらけ出している、などとは思わない。そうではなく、彼は自らの詩才をひけらかしているのだ。」<sup>29)</sup>とリュトブフは貧困ではない、という図式で語る。

リュトブフが他の詩に於いても「貧乏な馬鹿」を演じていること、この貧困のテーマが、ドイツの吟遊詩人ワルター・フォン・デア・フォーゲルワイデの作品や無名のラテン語詩人等ヨーロッパ各地で見られることを明らかにした Regalado 女史の研究<sup>30)</sup>は、「貧困」を語る修辞が存在し、それをリュトブフが使用しているということを納得させる。そもそも、リュトブフが貧困であったという事実は、虚構としての文学テキスト以外で、確認することはできないのだ。

目的は何か？

Regalado 女史の研究は、リュトブフの「不幸な詩群」に、詩的「私」the poetic “I”を確認することにより、『リュトブフの貧困』自体の目的は考察されなかった。そこで、修辞そのものを問うのではなく、その修辞を使用した理由、なぜリュトブフが貧困のテーマを利用する必要があったのか、という事を問いたい。

リュトブフ＝貧困説を唱えたデュフルネが、興味深い考察をしている。

Il faut remarquer que, dans cette requête, quand Rutebeuf évoque les causes de sa pauvreté, il ne parle que de facteurs qui lui sont extérieurs – avarice et égoïsme des riches, chier temps et charges familiales, absences du roi et croisades, mort de ses bienfaiteurs – alors que dans d’autres poèmes intervenaient des éléments plus personnels : passion du jeu, folie, mauvaise étoile, etc. Le destinataire du poème agit donc sur la thématique dans la mesure où il oblige le poète à adapter les composantes de sa requête.<sup>31)</sup>

この嘆願書に於いて、リュトブフが自らの貧困の原因を連想させるとき、彼は自らの外部の要因しか語らないと言うことに注目しなければならない、——守銭奴や金持ちの独善主義、物価高の世の中に家族の扶養、王の不在と十字軍、保護者の死——しかし一方で、他の詩にはより個人的な要素が介在している：遊ぶことへの熱狂やら、馬鹿騒ぎやら、不運やら。従って、詩の受け手が、受け手の嘆願の要素に適応させようと、詩人に協力する限りで、この詩の受け手は、主題に働きかけるのである。(括弧内滝口)

自らのことを語ったとされる身辺詩の一つと定義されているものの、詩の中で作者は、「貧困」の外的要因しか語らない。周りからどう扱われたか、が問題であり、自己である「貧困者」、すなわちこの詩の主題は、外的要因により規定されている。この事実、作者の狙いを表してはいないか。自己の貧困を語るのではなく、貧困のテーマを、外的要因によって語ることで、作者は、自らを取り巻く環境を非難しているのではないか。

では、作者を取り巻く環境とは何だろう。

リュトブフの作品は、デュフェイユの研究により年代設定がなされている<sup>32)</sup>。彼の研究に拠れば『リュトブフの貧困』前後の作品は以下の通り。(推定制作年代は上から下へ)

1271	La complainte dou conte de Poitiers
1272 以降	De Brichmer
	Dit d'Aristote
	Paiz de Rutebeuf
	La povretei Rutebeuf
	La nouvelle Complainte d'Outremeir

それぞれの作品の内容を確認すると、これらの作品は時系列で密接に結びついていることがわかる。そこで、作品中の記述を元に、作者とされるリュトブフの当時の状況を、想像豊かに再構成してみたい。

聖ルイの兄弟である、ボワチエ伯＝トゥールーズ伯のアルフォンスは、チュニスへの十字軍の復路の途中、1271年8月21日に死去する。彼は、詩人に対して非常に良くしてくれた君主であった。彼の死後リュトブフはLa complainte dou conte de Poitiersを作り、伯を賛辞する。

Partiz est li cuens de cest siecle,  
 Qui tant maintint des boens la riegle.  
 Je di por voir, non pas divin,  
 Que Tolozain et Poitevin  
 N'auront jamais meilleur seigneur...<sup>33)</sup>

伯は、この世から去りました。  
 彼は、善行の決まり事を非常に守ったのです。  
 あてずっぽではなく、真実を言いますが、  
 トゥールーズとボワチエの方々は  
 彼よりよい君主を決して持つことはないでしょう。

リュトブフは最大の庇護者を失ったのである。

新しい君主が即位する。彼は、昔の伯のお気に入りだったリュトブフには目をかけない。そこで詩人は、新しい王にたいするやっかみとして、金銭的に援助してくれる友人 Brichmer についての作品 De Brichmer を書く。

Ha ! Brichmers, biau tres dolz sire,  
Païé m'aveiz cortoisement,  
Que votre borce n'en empire,  
Ce voit chacuns apertement.<sup>34)</sup>

ああ、ブリシュメール、美しくとてもやさしい殿よ  
あなたは私に宮廷風に払ってくださいました。  
というのも、あなたの財布が空っぽではないからです。  
誰もがそのことをはっきりと分かるのです。

それでも新君主は作者の願いを聞き入れない。見本を示せば王もそれに倣うだろうというリュトブフの目論見は外れた。それどころか、自らの忠臣を作る為、宮庭では古株のリュトブフを無視して、貴族の家系の者を側近として扱う。このような新しい君主に対して、親の社会的地位が低かったであろう作者は、君主論を説くため、Dit d'Aristote を作る。

Si te prie por sainte Marie,  
Se tu voiz home qui le vaille,  
Garde qu'a ton bienfait ne faille.  
N'i prent ja garde a parentei,  
C'om voit de teux a grant plantei  
Qui sont de bone gent estrait  
Dont on asseiz de mal retrait.<sup>35)</sup>

お願いです、聖マリアにかけて  
もしあなたが、それに見合う者を見ましたら、  
恩恵を受けることを忘れてはなりません。  
その時、生まれなど、決して気にかけてはなりません。  
なぜなら、よく見るからです、  
良き人から生まれながら

その人からは悪事しか引き出せないような人を。

だが、新しい君主は結局リュトブフの言葉に耳を貸すことはなかった。そこでリュトブフは君主以外の人々に訴える為、新たな君主を攻撃する詩 *La paix de Rutebeuf* を作る。

C'il est moiens, que Dieus l'i tiengne !  
Que, puis qu'en seignorie veingne,  
G'i per honeur et biele chiere.<sup>36)</sup>

もし奴がただの人なら、神よ、どうか奴をそこから取り去ってください！  
というのも、あいつがこの国に来やがったから、  
私はその国で、名誉も良きもてなしも失ったのです！

同時に、王に対しては下手に出て置くのが良い。いわば、「飴と鞭」作戦である。だが、下手に出る場合、今までと同じように、忠告したり、頼んだりするだけでは効果がないことは分かっている。そこで、リュトブフは「貧困」を語ることにする。

Je ne sai par ou je coumance,  
Tant ai de matyere abondance  
Por parleir de ma povretei.  
Por Dieu vos pri, frans rois de France,  
Que me doneiz queilque chevance,  
Si fereiz trop grant charitei.<sup>37)</sup>

どこから始めようか、分からない程、  
私はたくさん材料を持っているのです、  
私の貧困を語るための材料を。  
神かけて、お頼み申し上げます、フランス国王様  
私に、いくばくかの援助金を、くださいませ。  
そうすれば、王様はとても偉大な慈悲をなしたことになりましょう。

その後リュトブフはどうなったか。恐らく王からお金をもらえないばか

りか、宮廷詩人の職を剥奪されたに違いない。詩を書ける状態ではなくなったのであろう。というのも、『リュトブフの貧困』以後、同年に作たとされる *La nouvelle Complainte d'Outremeir* を除き作品は残されていないのだから。

『リュトブフの貧困』を執筆したという正にその理由によって、作者の実生活上の「貧困」は疑わしい。そこで、なぜ貧困のテーマを使う必要があったのかということを考えると、作者を取り巻く環境に対する非難、すなわち、貴族出身の者だけを側近にとりたてるという慣習に従う新しい宮廷に対する非難の要素が見えてくる。デュフェイユの年代設定による『リュトブフの貧困』前後の詩群も、この仮説を支える要素を孕んでいる。

嘆願書という形式をとってはいるものの、リュトブフが貧困のテーマを使用した狙いとは、新しい宮廷を攻撃することであった。『リュトブフの貧困』は、現代の読者をも惑わす程、リュトブフの詩作の技能が冴え渡っている作品として読めるのだ。

## V. 結 論

リュトブフが貧困であったか、なかったか。それを歴史的事実として認識する事は出来ない。ただ、リュトブフという人間に帰される詩という文学テキスト内部での記述に基づいて作者の後半生を再構成するのであれば、彼は生まれは卑しくとも宮廷詩人であり、アルフォンス王からは丁重なもてなしを受けた家臣である、ということになる。その後を継いだ王に対して、忠言を述べる事が出来るだけの地位とあれば、少なくとも詩作の時点で、彼自身が貧困であることはないであろう。もし彼が本当に貧困にあえぐとすれば、詩を書くことが出来なくなった後のことだ。

リュトブフが「貧困」であり、この詩に於いて彼は感情を吐露しているのだという前提を受け入れて読むことで、この詩は「身辺詩」の一つとされ、読まれてきた。だがリュトブフが貧困でないとすれば、「身辺詩」とは距離をおいて、この詩自身が持つ機能が研究される必要があるのではないか。一つの試みとして、「貧困」の要因は極めて外的なものだから、細かな語句についても、詩全体についても、社会的な意味・意図を前提として読み取することは可能ではないか。本稿は、その読解可能性を示す試みである。



## 注

- 1) Harry LUCAS, *Rutebeuf: Les poésies personnelles* (Strasbourg, 1938 ; reprint, Genève, Slatkine reprints, 1974) .
- 2) 中原暁彦, 「リュトブフと『貧困』－最近の論文をめぐって－」, 『フランス文学語学研究』第 11 号, 早稲田大学大学院「フランス文学語学研究」刊行会, 1992 年, 119-130 ページ.
- 3) *Rutebeuf, Œuvre complètes*, éd. Michel ZINK (Paris, Bordas, Classiques Garnier, 1990. t.2), pp.419-423.
- 4) Edmond FARAL et Julia BASTIN, *ibid*, pp.17-20.
- 5) *Œuvres complètes de Rutebeuf, trouvère du XIII<sup>e</sup> siècle, recueillies et mises au jour pour la première fois*, éd. Achille JUBINAL (Paris, 1839, 2 vol.; Nouvelle édition, revue et corrigée, Paris, Bibliothèque Elzévirienne, 1874-1875, 3 vol.)
- 6) *Rustebuef's Gedichte nach den Handschriften der Pariser National-Bibliothek*, éd. Adolf KRESSNER (Wolfenbüttel, 1885)
- 7) Harry LUCAS, *ibid*, pp.97-98.
- 8) *Rutebeuf, le mariage Rutebeuf et autres poèmes*, Robert GUIETTE (Paris, Voix de la Terre, G. L. M., 1950)
- 9) *Œuvres complètes de Rutebeuf*, éd. Edmond FARAL et Julia BASTIN (Paris, Picard, 1959), t. 1, pp.569-573.
- 10) *Rutebeuf, Poèmes de l'infortune et autres poèmes*, éd. Jean DUFOURNET (Paris, Gallimard, 1986), pp.94-97.
- 11) Michel ZINK, *ibid*, pp.419-423.
- 12) Brian J. LEVY, *Reviews of French Studies* (Oxford, 1991, April ), pp.199-200. «Zink's decision will make a great poet that much more accessible to students and beyond...At all levels, this is an impressive edition. It does not replace FB (Faral-Bastin), which will still be the scholar's essential mine.» (括弧内滝口)
- 13) Michel-Marie DUFEIL, *L'Œuvre d'une vie rythmée. Chronographie de Rutebeuf* (dans *Musique, littéraire et société au Moyen Âge*, éd. par D. BUSCHINGER et A. CHREPIN, Paris, Champion, 1981)
- 14) *Rutebeuf, Œuvres complètes* (éd. Michel ZINK), *ibid*, p.5. «L'hypothèse de Dufeil reste une hypothèse.»
- 15) Harry LUCAS, *ibid.*, p.124. «Rutebeuf a perdu beaucoup de ses amis et

- protecteurs, dont certains sont morts (entre autres, peut-être, le comte d'Eudes, dont Rutebeuf a fait la Complainte), et d'autres ont suivi Saint Louis dans ses Croisades»
- 16) Edmond FARAL et Julia BASTIN, *ibid.*, p.571. «Il s'agit sans doute de la mort de protecteurs.»
- 17) Jean DUFOURNET, *ibid.*, p.95. «La mort de son côté s'est acharnée à me nuire»
- 18) Michel ZINK, *ibid.*, p.500. «Il s'agit probablement de la mort de protecteurs du poète.»
- 19) 岩本修巳, 「リウトブフの貧乏について」, 『成城大学経済学部創立 30 周年記念 論文集』, 1980, 728 (149)-715 (153) ページ.
- 20) 杉原整, 「リウトブフの貧乏」, 『フランス詩大系』(窪田般弥責任編集), 青土社, 1989 年, 59-61 ページ.
- 21) 天沢退二郎, 「リウトブフ貧窮歌」, 『フランス中世文学集 1』, 白水社, 1990 年, 466-467 ページ.
- 22) Albert POPHILET, éd., *Poètes et romanciers du Moyen Age* (Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1952), pp.940-941.
- 23) Edmond FARAL et Julia BASTIN, *ibid.*, p.147.
- 24) Adolf TOBLER et Erhard LOMMATZSCH, *Altfranzösisches Wörterbuch* (Wiesbaden, Franz steiner verlag GMBH), t. VII, 1965, col. 289.
- 25) Pierre FOUCHÉ, *Phonétique historique du français* (Paris, Klincksieck, 1969), vol. 2, pp.235-236.
- 26) Jean DUFOURNET, *Sur trois poèmes de Rutebeuf: «La Complainte de Rutebeuf», «Renart le Béstourné», «La Pauvreté de Rutebeuf»* (dans *Hommage à la mémoire de Gérard Moignet*, Strasbourg, 1980), p.428. «Rutebeuf est crucifié par la pauvreté, c'est ce qui lui permet d'être poète.»
- 27) 中原暁彦, 前掲論文, 126 ページ.
- 28) 岩本修巳, 前掲論文, 715 (152) ページ.
- 29) Nancy Freeman REGALADO, *Poetic Patterns in Rutebeuf: a Study in noncourtly poetic modes of the thirteenth century* (Newhaven-Londres, Yale University Press, 1970), pp.283-284. «He (Rutebeuf) simply adopts an appropriate poetic personality, that of the poor fool who has lost everything... I do not believe, then, that Rutebeuf is exhibiting the wounds

fate inflicted upon him in his poems of misfortune, but that he is proving his poetic talent.»

30) Nancy Freeman REGALADO, *ibid*, pp.282-311.

31) Jean DUFOURNET, *ibid*, p.425.

32) Michel-Marie DUFEIL, *ibid*, pp.279-294.

33) *La complainte dou conte de Poitiers*, vv.135-139.

34) *De Brichmer*, vv.17-20.

35) *Le Dit d'Aristote*, vv.20-26.

36) *La paix de Rutebeuf*, vv.4-6.

37) *La povretei Rutebeuf*, vv.1-6.